



アフリカ開発銀行グループ  
African Development Bank Group

アフリカとインド  
相通じる過去、共通の未来

ドナルド・カベルカ (Donald Kaberuka)

アフリカ開発銀行グループ総裁

---

インド・アフリカ研究センター (Indian Center for African Studies) における講演

ニューデリー（インド）

2013年2月1日

本日こうして、高名なるアフリカ研究／アフリカ・アジア協力推進センターにおきましてご挨拶させていただく機会を賜りましたことを光栄に存じます。

本日ここで、これほど多くの研究者・スタッフ、若い方々とお会いできることを大変嬉しく思います。

戦後まもない厳しい時期、インドは植民地解放闘争の先頭に立っていました。

アフリカの大部分も、10年後にその動きに続きました。インドの解放闘争がアフリカに、そしてアジアの他地域に大きな影響を与えたといっても決して過言ではありません。

ケニアを代表する知識人であるアリ・マズルイ（Ali Mazrui）教授は1989年、ネルー生誕100周年を記念するユネスコ主催のセミナーで講演を行いました。同教授は、ガンジーの「サティヤーグラハ（satyagraha、非暴力不服従運動）」がアフリカの政治活動家にどのような刺激を与え、その一方でネルーの積極的中立主義がポスト植民地時代のアフリカ諸国の外交政策の形成にどう貢献したかに注目していました。しかしマズルイ教授は同時に、その逆の影響にも気づいていたのです。

ガンジーの政治哲学は、南アフリカにおけるアパルトヘイトという不正への反応として発展しました。非同盟主義に関するネルーの確固たる立ち位置には、特に北アフリカにおける1956年のスエズ紛争を受けた東西超大国の対立が大きく影響しているのです。

つまり、インド洋の東西における解放への闘いは、非常に相通じるものだったのです。

アフリカ・インドの双方にとって、独立直後は大きな希望と期待に満ちた時期でした。

しかし残念ながら、その後の歩みは当初、特に最初の時期はあまり有望なものではありませんでした。

アフリカ諸国の経済は、貪欲なレントシーキング型の国家経済、政治的な動揺、そして正直に申し上げて冷戦の影響による複合的な効果により、低迷してしまいました。

アフリカにおける 1980 年代は、「失われた 10 年」とさえ呼ばれています。

インドの歩みについては私よりも皆さんの方がはるかによくご存知でしょう。

それでも私は、インドについて「開発を進めなかった場合」のモデルケースとしてインドを取り上げている、ガナー・ミュルダール (Gunnar Myrdal) の著書『Asian Drama』(訳注: 邦訳『アジアのドラマー諸国民の貧困の研究』、東洋経済新報社) 及びその他多数の文献を想起いたします。

アフリカとインドは、1970 年代の「アジアの虎」、1980 年代の中国が急成長を達成するのを辛抱強く見ていました。一方、サブサハラ・アフリカでは、多くの国が「ワシントン・コンセンサス」を契機とする構造調整のもとで苦闘を続けていました。

インドに関しては、1980 年代は依然として中央計画経済の残滓、フェビアン社会主義の大きな影響、抑圧的な国家統制に支配されていたと伺っております。

これらの政策の影響について詳しく分析する、あるいは現実とは別の展開に思いを巡らすことは、この場にふさわしくありません。

それはすでに別の場所で行われています。

ここでは、1990 年代初頭に、インド経済とアフリカの多くの国の経済が岐路に直面したことを言うておけば十分でしょう。

持続不可能な水準の債務、深刻化する貧困、マクロ経済の大幅な不均衡、外部から押しつけられた多党制への混乱に満ちた移行——こうしたなかでアフリカを支配したのは、「アフロペシミズム (Afropessimism、アフリカに関する悲観主義)」でした。

しかし、このあとすぐに見ていくように、変化の兆しはありました。

一方インドは、長く続いた社会主義経済の後、1991 年の国際収支の急激な悪化に直面して、広範囲にわたる市場開放と改革に乗り出しました。

わずか 4 年間で、内国直接投資 (FDI) は 1991 年の 1 億 3200 万ドルから 1995 年には 53 億ドルへと増加しました。

誰もが言うように、その後は歴史的な発展がありました。

2007年には、インドのGDP成長率は9%であり、世界で二番目に急速に成長する経済でした。

その後「相対的な減速」があったこと、アフリカの我々と同様に、インドも社会的包摂、不平等、若者の雇用などの問題と闘っていることは招致しております。

とはいえ、インドは今や「アフリカとは」別の軌道に乗っていることに疑いの余地はありません。

大衆的貧困の急激な減少、世界でも一流の企業の存在、G20に参加していること、こうしたことを考えれば、インドがこれまで達成してきたことを誇るのは当然です。

アフリカに関しては、前ミレニアムの終わりに現実的な転換が始まり、2000年前後に新たな局面が現れています。

この新たなダイナミズムの背後には、次のような要因があります。

- 健全なマクロ経済政策の組み合わせ
- 債務削減イニシアチブ
- 国際市場における強いコモディティ需要
- 急速な都市化を伴う人口動態
- 携帯電話の発達、ビジネス実践及びサービス提供のコスト低下

ガバナンスと政治状況が改善されたことにより、「アフリカ・リスク」についても全般的にポジティブな再評価が進みました。

多くの懐疑的な見解があることもしっかり承知しております。そうした見解は、インフラの欠陥、熟練労働者の不足、小規模で細分化された市場、繰り返される政治危機に注目し、恐らくはあまりにも性急に、アフリカはまだ困難を脱してはいないと結論しています。

しかしその反対に多くのアフリカ諸国は依然として活気を示しており、リーマン「ショック」以後の時期においてさえ、その流れは逆転していません。

本日お話するように、グローバル経済が新たな成長要因を探し求めるなか、インド・アフ

リカ間の貿易は過去 5 年間だけでも 6 倍に成長しており、約 700 億ドルに達しています。

インドの政府関係者、企業関係者の皆さまとの協議を踏まえて、私は、両国がこの流れを次のレベルに引き上げることができると確信いたしました。

サブサハラ・アフリカには、今や主要な純石油輸出国が 10 カ国もあります。実際、石油はアフリカからインドへの代表的輸出品であり、輸出総額の約 50%に相当します。

しかし、アフリカは、石油や天然ガス、その他の天然資源だけの地域ではありません。

アフリカのダイナミズム、その未来と約束、集団としての力を支えているのは、その人口の若さです。

インドの人口とアフリカの人口はほぼ同じで、人口動態上の構成も同じです。

インドの国民一人あたり GDP は 1800 ドル、これはアフリカとほぼ同じです。しかしインドの長所 (28 州で構成される連邦) は、アフリカの短所 (54 カ国に別れている) なのです。

このインド亜大陸で連邦制が機能している状況には、学ぶべき点が多々あります。

次のような数字を見てみましょう。

アフリカに限った数字です。

GDP が 300 億ドル以上の国は 11 カ国です。

2000 億ドル以上の国が 3 カ国、1000 億ドル以上の国が 4 カ国、500 億ドル以上の国が 2 カ国、300 億ドル以上の国が 2 カ国です。

43 カ国は、300 億ドル以下なのです。

これがアフリカの構造的な弱点です。小規模な経済が乱立しており、それぞれのあいだはほとんど統合されていないことが多いのです。

この点において、インドが経験してきた状況はもちろん異なります。連邦構造という仕組みは、特にインドのような民主国家においては、ときとして複雑でイライラさせられますが、そのまともは頼りになる要因です。

ここで行った協議を通じて、私はインフラ、鉄道、道路、エネルギー、IT、そして特に食糧安全保障の面において協力の機会があると感じました。

また何よりも、開発に向けた挑戦と経験について、知識を共有することができると分かりました。

あまりにも長いあいだ、輸入されたモデルによって、私たちの経済改革は遅れてしまったのです。

アフリカ開発銀行でもよく言うのですが、今や、経済モデルなどと言うものはないのです。ただ、自由放任型資本主義から国家主導の資本主義（開発主義国家と呼ぶ人もいます）、福祉資本主義に至るさまざまな経験、また単に苦闘の時代に関する経験があるだけなのです。

開発に向けたエスカレーターなど存在しません。国々がそれぞれ、自国にとって機能するものを探し求めなければならないのです。

階段を上っていくことは困難な道のりですし、いいときもあれば悪いときもあるでしょう。失敗もするでしょう。しかしそれは自分自身の失敗なのであって、そこから学ぶのです。しかし階段を上りきったときには、以前よりも元気になっているでしょう。

それが開発の現実なのです。

1998年のアフリカ・インド首脳会議によって、人的資源開発のための「サポート・アフリカ」に基づく能力構築イニシアチブも含め、そうした〔知識・経験〕共有の枠組みが提示されました。

すでに多くの取り組みが進められています。

政府、企業関係者、インド輸出入銀行と共に、私たちは投資・貿易の機会をさらに拡大していく方法を見つけました。

アフリカ開発銀行は主導的な役割を演じています。

またインド政府は、当行に対し、知識共有などの分野に利用できる信託基金を提供しています。

恐らく知識共有の分野は、協力的な取り組みの新たな領域を見つけるために、貴センターと当行が共に探求を進められる分野です。

過去 25 年にわたり、開発を論じるうえで重大な意味を持つ出来事が、アフリカ、インドでたくさん起きてきました。

開発をもたらす要因は何か、社会的包摂、雇用創出、不平等、天然資源の管理などへの取り組みについて、共有すべきものはたくさんあります。

国外居住者も含めた人材管理についても共有すべき経験があります。

そして以上の点はすべて、内発的なソリューションの新たなパラダイムを探求するという文脈のもとにあり、世界の新たな成長の二つの極としてアフリカ、インドのポテンシャルを解き放つものです。

現在、グローバル経済はリセッションに、あるいは成長の推進力の弱さに苦しんでいます。

世界経済が今必要としている新たな成長は、主として、新興経済諸国とアフリカからしか得られません。

私たちのチャレンジは、それを実現することです。

貴センターでお話しする機会をいただいたことを改めて感謝いたします。

これが、アフリカ開発銀行及びアフリカ全体との、これまでよりはるかに緊密な協力の始まりとなることを願っております。

ご清聴ありがとうございました。